藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

絵本の読み聞かせ
～機関車トーマスと走る（上）～

三人の子供を授かったが、子供たちが幼いころ、絵本の読み聞かせをしたという記憶がない。と言うより、読み聞かせは妻の役目で、私はしなかったというのが正確な表現だろう。

そんな私が喜寿を過ぎた今、絵本を読む。それは間もなく二歳になる長男の子供、つまり孫が「機関車トーマス」が大好きらしいとわかったからである。

この話を東京にいる長女に知らせると「機関車トーマス」シリーズの絵本や関連の靴下、タオルなどを送って来る。直接孫に送らずに私のところに送って来たのは、長男が別の所に家を建てたので、私たち夫婦が孫に会う機会を少しでも多くするためだろう。有り難い配慮である。

三人の子供のうち、絵本が一番好きだった長女からは、その後も機関車トーマスを含む「汽車のえほん」シリーズ全二十六巻などが送られて来た。

さらに私個人にも「機関車トーマスと英国鉄道遺産（秋山岳志著・集英社新書）」が届いた。そして電話で「これで巡礼記に一語書けるでしょう」と言う。

ここまで言われて書かないと父親の沽券（こけん）はますます下がる。と言う訳で、喜寿を過ぎて絵本と対峙（たいじ）することになったのである。

「汽車のえほんシリーズ」の著者・ウィルバート・オードリーはイギリス国教会の牧師である。オードリーの父親も牧師で、鉄道に詳しく、教会が鉄道の近くにあったこともあり、幼いオードリーに機関車や鉄道作業員の話をよくしてくれたという。

オードリーの息子、クリストファーが三歳の時、はしかになる。オードリーは何とかして息子を喜ばせようと自分が父親から聞いた機関車の話を即興で物語にして話してやる。

何回も何回も話すうちに物語の骨格ができ上がる。ストーリーが違うとクリストファーの方も「それは違うよ」と指摘するようになる。このためオードリーは毎回同じ話になるようにノートに物語を書いた。

母も横でこの話を聞いていたので、ある日「クリストファーだけでなくほかの子供たちのために本にして出版しよう」と提案する。

こうして一九四五年に誕生したのが最初の絵本「三だいの機関車」。そして一九七二年までの二十七年間に「機関車トーマス」など二十六冊の「汽車の絵本」シリーズが完成したのである。

もしこれが二十六冊の絵本だけだったなら、これだけ世界中の子供たちに愛されることはなかっただろう。

原作の面白さに目をつけたイギリスの放送局が、一九八四年から幼児向けアニメテレビ番組として放送したことで、機関車トーマス・シリーズは世界中に広がり、日本でも一九九〇年から民放やNHKで放送している。

私が一番感心したのは、この物語が父親の読み聞かせから誕生したことである。絵本の読み聞かせは母親の役目と決めつけ、妻にまかせっきりであったことを今、反省している。そして遅まきながら今絵本に対峙しているのだが、学ぶことの多いことに驚く。

機関車トーマスは孫、長女、私らを連結して今も走っているのだ。

幼児だけでなく大人も乗せて今も走る

孫はトーマスが大好きだ